



長崎県立大学佐世保校附属図書館

図書館だより

2023.11 No.40

もくじ

| | |
|----------------------------|-----|
| 橋本 優花里 副学長「本と図書館の思い出」 | 1 |
| 前田 瞬 先生「温故知新」 | 2 |
| 谷澤 毅 先生「『知の奥の院』のような文庫の思い出」 | 2 |
| 深谷 直弘 先生「生活史ブーム？」 | 3 |
| 松下 愛 先生「宇沢弘文の社会的共通資本」 | 3 |
| 佐世保校附属図書館からのお知らせ | 4～5 |
| シーボルト校附属図書館紹介 | 6 |
| 図書館長のコメント・デザイナーよりひとこと | 7 |

表紙イラスト「彩り」 作 村井 雅



本と図書館の思い出

副学長 橋本 優花里

図書館だよりへの寄稿のお話をいただき、本や図書館との思い出をたどってみました。

本についての私の一番古い記憶は絵本です。今でも読んだ絵本の内容やその時の感覚が鮮やかによみがえります。例えば、『いちごばたけのちいさなおばあさん』に出てくる、いちごの実を色づけるための赤い水は何とも美味しそうで、どうやったら同じ水を作ることができるのかを色々想像してみたり、『ゆうちゃんのみきさーしゃ』で作られるアイスクリームが食べたくて、母に作ってくれるようにせがんだりしていたことを思い出します。

小学生、中学生、高校生の時にも思い出の本があります。小学生の時にはマザーテレサの伝記に触れ、彼女の生き方に憧れました。中学生の時には赤川次郎にはまり、片っ端から読みました。高校生の時には、アメリカへの留学の際に友人から吉本ばなの『キッチン』をプレゼントしてもらったので、日本語が恋しくなると繰り返し読みました。その中に出てくるかつ井のエピソードは、「帰国したらまずは空港でかつ井を食べよう」と心に強く決めるほど印象的なものでした。

大学に入ると、娯楽のための読書はめっきり減り、専門書と論文との、まさに「格闘」が続きました。内容を理解するために何度も何度も同じ箇所を読んだり、別の文献を調べたり、できの悪い私の頭にちゃんと収まるまで必死に解読しました。ところが、修士論文を執筆しなければいけないときに、パトリシア・コーンウェルの『検屍官』シリーズにはまってしまい、かなりの時間を費やしたのは良い思い出です。

図書館については、留守番の代わりに訪れたのが最初の出会いです。親が用事を済ますまで、色々な本に触れました。ただ、私は本については手元に置きたいと思うタイプで、借りるよりは買うことを優先していましたので、その後、図書館からは足が遠のいていました。しかし、大学に入ってから毎目のように足を運ぶことになりました。

なぜなら専門書は非常に高価で気軽に買うことができず、論文も図書館を通じてしか入手できないからでした。現在でも図書館には大変お世話になっており、図書館を通じて複数の著書や論文を取り寄せ、戦う日々です。読みたい本や論文がスッと手に入る環境には、感謝しかありません。

さて、ここまで本と図書館に関する私の記憶を掘り起こしてきましたが、最後に、私の最近の研究のきっかけとなった白波瀬佐和子氏の『生き方の不平等—お互いさまの社会に向けて』（岩波新書）をご紹介します。この著書では、我々の社会に存在する様々な不平等が浮き彫りにされ、その実態と原因が考察されています。そして、それらの不平等を理解し、誰もが当事者になりうる可能性を踏まえ、共に支え、共に助け合う「お互いさまの社会」を実現するためにはどのような力を磨くべきかが説かれています。その力とは、他者感覚に根差した社会的想像力です。他者感覚とは「単に他者の気持ちを理解するのではなく、自らが他者にはなり得ないことを自覚しつつ、他者の気持ちを理解することの限界を認識したうえで、他人事としてではなく、社会の構成員の一人として問題に向き合うこと」と説明されています。このような感覚を身につけ、「当事者でないことの限界を感じつつも、他人ごととしてでなく社会の問題をとらえようとする」ことが社会的想像力であり、これからの社会に生きる我々に必要な力であるということなのです。

社会的想像力の磨き方や他者感覚の身につけ方については、具体的な方法は記されていません。しかしながら、その方法を見出し、実践することが対人支援を専門とする私の今後の研究テーマであると同時に、これからの教育の最終目標だと感じています。

本稿にはそれぞれの本の内容をあえて詳しく書きませんでした。「どんな本だろう」「ちょっと探してみようかな」と思っただけいたら嬉しく存じます。



温故知新

「知の奥の院」の ような文庫の思い出

国際経営学科 谷澤 毅

経営学科
前田 瞬

私は、学部生・大学院生時代の指導教授と定期的なオンライン研究会（雑談会?）をしています。その中で、MIS（経営情報システム）を学ぶ者にとっての古典的な書籍のひとつである日本生産性本部・日本電子計算開発協会共編『アメリカのMIS：訪米MIS使節団報告書』（ペリカン社、1968年）を十数年ぶりに読み返す機会がありました。

本書は、当時の日本産業界の錚々たる面々が、アメリカ政府機関や企業で運用されているMISの現状やそれを活用したビジネスプロセスを視察した成果がまとめられています。日本国内へのMIS普及と情報産業を発展させるために「民間企業に対する提言」・「政府に対する提言」・「使節団員の所感」という形で“未来へのメッセージ”が示されています。使節団員が当時のアメリカのMISの現状を見聞して、そこから何を考え、何を心得、何を目指していたのかを知ることができます。

近年、世界中の政府や企業が「DX（デジタルトランスフォーメーション）推進」を掲げ、様々な取り組みをしています。本書に示されている内容は、今でも学ぶべきことが多いことに気づきます。コンピュータの技術革新は日進月歩です。他方、コンピュータを経営意思決定、経営戦略立案、ビジネスプロセス革新などに“利活用”するための組織づくり、人材育成・教育は普遍的な課題であり、昔も今も組織の情報化実践には必要不可欠であることを改めて気づかせてくれる一冊です。

今回は、MISの古典的な書籍から、現代において学ぶべきことが多々あることを紹介しました。皆さんがそれぞれの興味関心に応じて調査・研究に取り組むときにも、昔の成果や出来事を再訪することで、新しい知識・見解を導き出せることが多くあります。図書館は、「故きを温ねて新しきを知る」ことができる知の集積地です。皆さんも図書館を訪れて、たくさんの書籍に触れ、博覧強記な人になってほしいと願っています。

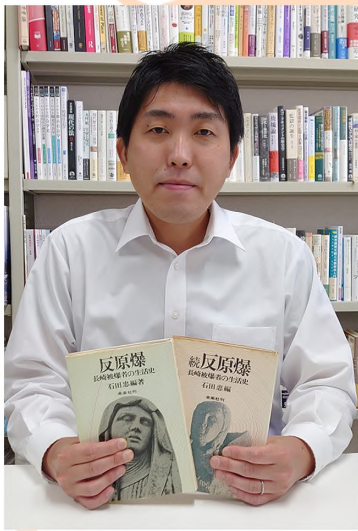
もう10年以上も前に訪れた札幌大学の山口文庫のことを、今もよく思い出す。

図書館運営委員会がまだ収書委員会と呼ばれていた2009年の2月、委員長として山口昌男の蔵書からなるこの文庫を訪問した。山口昌男（1931～2013年）は博識と行動力で知られた文化人類学者。自らが学長を務めた札幌大学に蔵書を寄贈し、それを学生だけでなく一般向けにも公開したのである。

しかし、公開されたとはいえ、当時山口文庫は建物の地下の、かなりわかりにくい場所にあった。入口もスチール製のドアがあるだけで、人をいざなうような雰囲気は感じられない。この部屋の奥に宝の山が「隠されている」ことを知る札幌大学の学生も限られていたことと思う。文庫に足を踏み入れてすぐ目にするのは、書籍を詰め込んだ書棚とそこに入りきれない本の山の数々。幅広い分野の膨大な数の書籍が放つ「圧」は強烈だった。しかも、これらの書籍は十進分類法のような正規の方法で分類されてない。珍本貴書から雑本まで、持ち主であった山口昌男の知的関心や問題意識に従い配架されている。それゆえ、この一冊と目標を定めて素早くそれを見つけ出すことは容易いことではない。場所といい本の並べ方といい、知の迷宮のような山口文庫は学生本位の、使い勝手の良い文庫であるとは言えないのである。

言うなれば、山口文庫のような存在は、普通の図書館や本屋では満足できない学生が行き着く先なのであろう。書籍の魅力、知の世界の奥深さ、楽しさを知ってしまった学生は、もう後には戻れない。そのような学生が辿り着く先に山口文庫はある。至宝ともいふべき秘められた知は、インターネットなどを通じてそう簡単に手にすることはできない。学生といえども、入手のためにはある程度の苦労を経験することになる。山口文庫は、そのような苦労をいとわない学生のための、まさに「知の奥の院」として位置づけられるのであろう。





生活史ブーム？

公共政策学科
深谷 直弘

ここ数年、出版業界（社会学関連）では「生活史」と名のつく本が次々と刊行され、人気です。「生活史」とは個人の人生で経験してきたことの語り、生きてきた経験の履歴です。こうした本は、様々な経験をした人たちがどのように思い、生きてきたのか、そしてその経験にどう向き合うべきなのかを個別具体的に読者に教えてくれます。私にも4年前に、父の病気のことで本ではありませんが、webサイトから胃がんの体験談を読んで参考にしようとしていた時期がありました。

私の研究テーマである長崎の原爆問題についても、被爆者の生活史に関する本が多く刊行されてきました。古典として『反原爆』1973年、『続反原爆』1974年（未来社）があります。これらは、当時一橋大学の教員であった石田忠と大学生らで構成する社会調査ゼミナールの研究成果をまとめたものです。

『反原爆』第1章では、石田が長崎の原爆詩人・福田須磨子の生活史を検討しています。そこでは福田が、戦後直後から＜原爆＞により自己の存在を否定され「社会」との関わりを断ったものの、その後、新しい人間関係を構築することで他者からの承認を得られ、自分の社会的役割を自覚し、被爆者としてのアイデンティティを獲得した過程が描かれています。これは当時、精神科医・R.J. リフトンが被爆者の精神（自己）を「内面的な死」（自己の否定）と呼び、そこからの回復を否定的に捉えていたものに対して、この議論はこの破壊された自分（精神）を取り戻す（回復）ことが可能であることを示しています。

とはいえ、いきなり石田の章を読むと難しく挫折しますので、それ以外の章から読み進めることをお勧めします（読みやすい！）。そこでは被爆者が日々の暮らしの中で（仕事をしながら）、どう＜原爆＞と対峙しつつどう生きてきたのかが、リアリティを持って描かれています。

生活史に関心があれば、最近の本だけではなく、古典も手に取ってみると新たな気づきを得られるかもしれません。



宇沢弘文の 社会的共通資本

実践経済学科科
松下 愛

私の恩師の先生である宇沢弘文（1928～2014年）の著書『社会的共通資本』（岩波新書）をご紹介します。同書は2000年に出版され、多くの人に求められ現在もなお32刷の増刷がなされ影響を与え続けています。

宇沢弘文は数理経済学分野で最先端の理論を構築し、ノーベル経済学賞に最も近い日本人と言われた経済学者です。公害問題や環境問題などの分野にも取り組み、経済学が人間の幸福に資するものであるかを問い続け、「哲人経済学者」の異名を持ちます。

米国の金融危機以降の資本主義批判の中で宇沢弘文の著作が再び注目を集める理由に、あらゆる分野の観点からも共感できる哲学がそれぞれの根底にあることが考えられます。新型コロナウイルスの流行により世界の人々の生活と世界経済の状態が大きく変化し、グローバリズムの実態が問われ始めている今だからこそ社会的共通資本の重要性が高まっています。経済学は金儲けの学問であると考える人もいますが、宇沢弘文は人々の生活の中で大事なものは金銭に換算できないという観点から、社会的共通資本の概念を構築しました。

社会的共通資本を国や地域で守り、市場原理主義のもとで民間企業が利益を貪る対象にしないことが、人々がより豊かに生活するために必要であると考えたのです。それゆえに「豊かな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的魅力のある社会を安定的に維持する」ためには「自然環境・社会的インフラ・制度資本（教育、医療、金融、司法、行政）などの社会的共通資本の整備が必要」と主張しています。

経済成長と人間の豊かさ・幸福の程度が相関しない時代に入った今日の日本や世界の多くの地域において、宇沢弘文の社会資本の理論が共感を呼び、新たな世界の観点から『社会的共通資本』を見直す時代がきたのです。この本を通して、皆さんの観点から「ゆたかな社会」とは何かを改めて考える契機になりますと幸いです。

佐世保校附属図書館からのお知らせ

図書館の利用状況

夏期休業中のため
来場者数が
少なくなっています

| | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 人館者数(人) | 4,138 | 3,934 | 4,549 | 3,720 | 1,678 |
| 貸出冊数(冊) | 659 | 568 | 839 | 647 | 550 |

貸出数上位図書ピックアップ

お気に入りの
本に出会いに
行こう!!



文芸書

ラブカは静かに弓を持つ
(集英社)
安壇 美緒



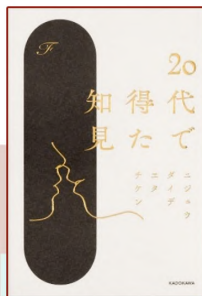
汝、星のごとく
(講談社)
凧良 ゆう



方舟 (講談社)
夕木 春央

一般書

20代で得た知見
(KADOKAWA)
F



一生役に立つ
しんどくならない
「ひとり暮らし」
ハンドブック (光文社)
藤井 由利奈

日本ご当地アイス大全 (辰巳出版)
アイスマン福留

専門書

日経TEST
公式テキスト&問題集
(日経BP 日本経済新聞社)
日本経済新聞社

「顧客消滅」時代の
マーケティング (PHP研究所)
小阪 裕司

試験対応
新・らくらくミクロ
経済学入門 (講談社)
茂木 喜久雄



図書館の行事報告

2023年度 学生による選書ツアー



9月21日(水)、丸善博多店で
選書ツアーを開催しました！

学生3名、教員1名、職員2名の計6名
が参加し、73冊の本を購入！

台風による延期に伴い書店訪問を辞退した学生4名にも
インターネットで選書して貰いました！



選書した本は、
図書館2階
選書ツアーコーナーに
展示します！

学生のオススメ本の
紹介POPと合わせて
展示しますので
要チェック



学生アルバイトについて

現在10名の学生がアルバイトをしています。
平日は17時～22時、土曜日は9時～17時まで
カウンター業務や本の配架等を行っています。



学生アルバイトからのコメント

たくさんの本に触れることで世界が広がり、教養が高まったと感じます。
地域の方の利用が許可され来館者数が増えたため、図書館に活気があふれる
ようになって嬉しいです。
毎月新刊コーナーが更新されたり、特設コーナーが設置されたりするので、
常に飽きない楽しさがあります。
ぜひもっと多くの学生の皆さんに図書館を利用させていただきたいです！

国際経営学科4年辻本さん・経営学科3年亀岡さん・公共政策学科2年崎元さん



シーボルト校附属図書館紹介

シーボルト校図書館について

1999年度に県立長崎シーボルト大学
附属図書館として供用が開始された
この図書館では、
2022年度末の時点で
220,919冊の本を収蔵し、
12,588冊を貸出しています。



正門を入って
正面が図書館です

施設内の紹介

AVコーナー



グループ学習室



施設内には、250席の閲覧席や
29台のパソコンがあります。
また、PCやAV機器を使用して各種コンテンツの
閲覧ができるAVコーナーや、
個人閲覧室、グループ学習室、ラウンジ等、
快適な学習空間が整っています。
専門書、一般書等の印刷資料の整理や、
デジタルコンテンツの充実を図り、
学内のネットワークシステムを通じての
情報提供に努めています。

学生の図書館活動

当館では、図書館の運営をサポートする
「図書館サポーター」として活躍したい学生を募集しています！
「おすすめ本」は図書館サポーターである学生が活動の一環
として作成したもので、入り口付近に設置しています。



佐世保校とシーボルト校に在籍する学生・教職員は、
学生証（利用者カード）を持参することで
両校の図書館に入館でき、図書の貸出もできます！
ただし、返却は貸出館になりますのでご注意ください。
図書の取り寄せもできますので、ぜひご利用ください。
※詳細はカウンターにお尋ねください。



幸運をつかむ装置として

附属図書館長 西岡 誠治

大谷翔平選手の大リーグでの活躍には、皆さんも胸を熱くして声援を送られたことと思います。彼の人気の理由はその投打の好成績のみならず、常に笑顔で周囲への心配りを忘れない姿勢にもあるとされています。その代表例は、グラウンドのゴミ拾いでしょう。大リーグのスター選手がグラウンドに落ちているゴミを拾う様子は、米国人には衝撃的だったようで、話題を集め、日本でも紹介されました。

実はこのゴミ拾い、大谷氏が高校生の時から「運をつかむ」秘訣の一つとして心がけているそうです。その秘訣は8つあり、あいさつ、プラス思考、などととも「本を読む」ことも挙げられていました。私も写真のように、大学への通勤途中に道端のゴミを拾うことがありますが、さらに読書に励むことで、幸運が訪れるかもしれないとの期待を感じています。

さて、今回の図書館だよりは前号で試みた「デザイン性の向上」を継承するとともに、学生の皆さんへの聞き取り調査に基づき、「文章を減らして図書館情報を増やす」ことに取り組みました。その過程で、執筆担当の4人の先生方に原稿をコンパクトにすることにご協力いただいたほか、図書館スタッフやアルバイト学生にも執筆に参加してもらいました。また、シーボルト校附属図書館にお願いして、紹介欄を設けさせていただきました。デザインは引き続き「お絵かきサークル」にお願いしましたが、前回担当した古賀香雪部長の配慮で3年生の村井雅さんに加わってもらい、表紙絵ほかの主要部分を手掛けてもらいました。

皆様のご協力で、図書館だよりの魅力度向上へ一歩前進できたように思います。この歩みをさらに進め、図書館が幸運をつかむ学内装置としての役割を果たしていけるよう、微力ながら取り組んで参りたいと思います。

デザイナーよりひとこと

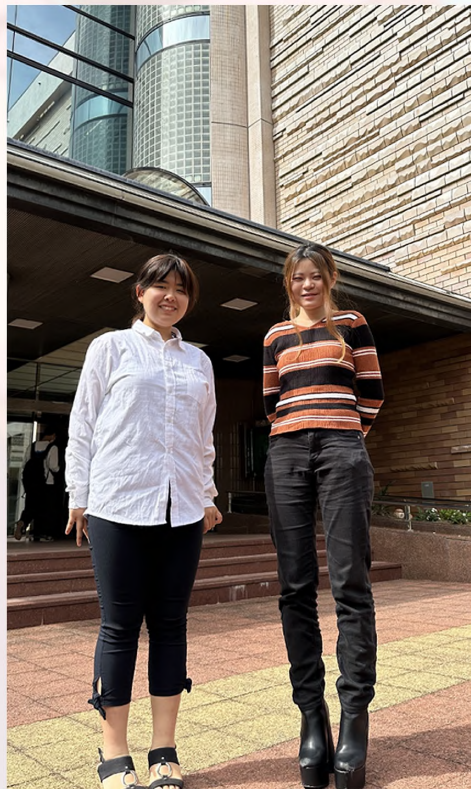
今回ご縁をいただき、表紙のイラストを作成いたしました。イラストのコンセプトは「彩り」です。長崎県立大学のロゴに用いられる、橙色と水色を組み合わせ、秋らしい鮮やかさを描きました。

さて、長い夏が終わり、秋の訪れを知らせるかのように風が冷たくなる今日この頃。みなさんは秋という何を想像するでしょうか。「芸術」「文化」「スポーツ」……。〇〇の秋、と称されるものはとても多いです。

そんななかで、私が想像したのは夕日のように紅く染まる紅葉の姿でした。パキリと目につく配色と鮮やかな色合いで、秋の持つ豊かな色彩と学生らしい鮮烈さを表現いたしました。

たくさんの方の目に留まっただけだと嬉しいです。

公共政策学科3年 村井 雅



前回の5月号に引き続き、デザインに携わらせていただきました。今回は、後輩の村井が作成した表紙のポップさや彩りにあわせて、デザインも明るく元気が出るようなものになっています。

今、この11月号をデザインしながら「もう11月か」と感じています。大学4年のこの時期と言えば、学生最後の夏休みも終わり、就職予定先の内定式も終わり、授業もゼミしかないため3年間毎日通っていた大学にも殆ど行かなくなり、あとは卒業論文を書いて卒業するだけ。そんな寂しい時期に、図書館だよりを通じて、数ヶ月ぶりに大学へ足を運び、先生方とお話したり、写真を撮ったり、最後に楽しい思い出をつくっていただきありがとうございました。

来年度からは私も社会人です。次回の5月号は、きっと社会人としてこの図書館だよりに手を取るのだろうと思うと、今から楽しみです。

公共政策学科4年 古賀 香雪

長崎県立大学佐世保校附属図書館 〒858-8580 佐世保市川下町123 TEL:0956-47-2191(代表) <https://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

当館は本学学生以外の方でも県内にお住い又はお勤めの15歳以上の方は利用できます。

開館時間 平日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）

土曜日：午前9時～午後5時まで

休館日：日曜日・祝日・大学閉校日など

